

大学における地域子育て支援グループ活動Ⅲ

— コロナ禍の子育て支援を考える —

柳瀬 洋美¹⁾

¹ 東京家政学院大学 現代生活学部 児童学科

Regional Childcare and Parenting support group in the university Ⅲ

—Thinking about Childcare and Parenting support under the Corona (COVID-19) related crisis—

Hiromi YANASE¹⁾

¹ Tokyo kasei gakuin University

新型コロナウイルス感染症（以下、コロナとする）のパンデミックは我々の社会生活に大きな変化や影響をもたらした。中でも女性のメンタルヘルスへの影響は深刻で、産後うつ病の発症率は2倍以上であるという。長引くコロナ禍による影響から孤立感や不安感が深まっている子育て家庭も少なくない。

現在、東京家政学院大学で筆者が実践している「ぼかぼかひろば」は、地域在住の0歳から3歳までの乳幼児とその家族（親・きょうだい等）を対象とする親子参加型の地域子育て支援グループ活動であるが、同活動もまた、コロナの感染状況に翻弄されながら、従来とは異なる形式での活動を余儀なくされた。

本研究では、コロナ禍というかつて経験のない社会状況の下で実践した2年間の活動を振り返るとともに、コロナ収束後も見据えながら、大学における地域子育て支援活動の今後の展開について検討した。

キーワード：子育て支援 オンライン活動 子育てひろば コロナ禍 保育者養成

1) 東京家政学院大学

〒194-0292 東京都町田市相原町2600番地

1 Tokyo Kasei Gakuin University.

2600 Aihara, Machida (194-0292)

I 本研究の背景

1. 大学における地域子育て支援活動が果たす役割とその意義

大学を地域における重要な知的資源と位置づけ、地域の活性化に向けて積極的に活用しているという連携の取り組みは、近年様々な大学と地域で行われている。2005年には中央教育審議会の答申で大学の機能の一つに「社会貢献機能(地域貢献等)」が位置づけられ、また、2006年に改正された教育基本法では大学の教育や研究の成果を広く社会に提供することで社会の発展に寄与すること等が、新たに大学の役割として規定されている。さらに2007年の学校教育基本法の改正では従来の学術研究、人材育成に加え、新たに教育研究の成果を広く社会提供することが大学の果たすべき「第三の役割」として位置づけられた。この社会貢献が第三の役割と位置づけられたということは、大学自らが従来よりも能動的に社会と関わり、社会の形成の一端を担う役割を果たすことが強く求められることを意味している。¹⁾

近年、物心両面で多様な変容を遂げてきた日本において、少子化や核家族化、対人関係の希薄化などの変容は、社会の最小単位と言われる家族に影響を及ぼしてきた。育児不安や虐待など、子どもと家族に係る憂慮すべき問題も少なくない。こうした状況にあって見直されているのが「地域の持つ力」であり、その地域の子育て力の活性化と充実化を図る上で、大学による地域子育て支援活動は、大学と地域連携の重要な取り組みの一つとして位置づけられると考える。

保育者及び幼稚園・小学校教員養成校でもある本学の地域子育て支援活動は、運営責任者が「保育」や「心理学」、「児童学」を専門とする教員であり、保護者にとっては、子育てに関する知識やスキルについて学生を通して学ぶことができる。一方、学生にとっては「人生の先輩」である保護者から社会人としての経験や親としての経験について学ぶことができる。

そこには「共に育ちあう」関係が存在する。

2. コロナ禍の子育て家庭の現状

日本で最初に新型コロナウイルス感染症（以下、コロナとする）患者が確認された2020年1月以降、瞬く間にコロナは全世界に広がり、日本では同年4月に緊急事態宣言が発令され、我々の生活は一変した。長引く自粛生活や先の見通しの持てない状況が物心両面に及ぼす影響は深刻で、

中でも女性のメンタルヘルスへの影響は大きい。

妊産婦を対象に実施されたメンタルヘルスに関する調査（松島ら、2020）では、女性の産後うつ病の発症リスクが、コロナ禍前と比較し2倍以上であるという結果が出ている。産後うつ病は、当事者はもちろん、その子どもや家族への長期にわたる深刻な影響が懸念され、社会全体で当事者とその家族を支援する体制の充実が求められている。

感染予防の観点から、子どもの成長発達に重要な意味を持つスキンシップを控えざるをえなかったり、周囲の人々の表情がマスクで隠れてしまい読み取りにくかったり、と子どもを取り巻く環境へコロナが与える影響が今、懸念されている。

II 目的

本研究では、コロナ禍における2020年度及び2021年度の2年間の「ぼかぼかひろば」活動を整理、考察するとともに、大学における地域子育て支援の今後の展開について、コロナ収束後も見据えながら検討することを目的とする。

III 方法

①コロナ禍における子育て家庭の現状を調べるとともに、2020年度及び2021年度の「ぼかぼかひろば」の活動内容について、コロナ禍での新たな取り組みを中心に整理する。

②参加学生やスタッフ（補助員）、また保護者へのアンケート調査やインタビュー調査をもとに、大学における地域子育て支援の今後の展開について検討する。

アンケート調査及びインタビュー調査の実施手続きは以下の通りである。

参加保護者へのアンケート調査

コロナ感染防止の観点からGoogle Formsを用いたWEB調査を実施した（2020年度：参加者10名に実施し9名が回答、2021年度：参加者11名に実施し9名が回答）。実施時期は前期終了後の8月と後期12月である。

スタッフ（補助員）へのインタビュー調査

コロナ感染防止の観点から遠隔会議システム（Zoom）を用いて、スタッフ（補助員）2名を対象に、各年度活動終了後の2月の第1週目に個別に実施した。時間は1人30分程度である。「オンライン活動について」「学生指導について」「その他、今年度の活動全体を振り返って」の3項目を共通の質問項目とし、その他、自由に語ってもらった。

学生の活動後の振り返りとまとめ

参加学生（2020年度：9名、2021年度：12名）については、毎回の活動後の話し合い（オンラインまたは対面）と活動後の振り返りシートおよび期末レポートについて、その内容を整理し分析した。振り返りシートと期末レポートはGoogle Forms及びGoogle Documentを使用した。

倫理的配慮

参加者全員に対しては、あらかじめ「ぼかぼかひろば」が大学での活動であり、教育と研究の観点から、活動の記録を行うことや研究への協力を依頼することがある、ということについて了承を得た上で参加申し込みを受け付けている。また、各調査実施前に改めて調査の趣旨を説明するとともに、調査協力は任意であること、調査実施に際しては個人情報の管理を徹底することや、得られた結果は研究以外の目的では使用しないことを伝えた上で調査を実施している。

IV 結果及び考察

1. 子育て支援グループ活動「ぼかぼかひろば」

「ぼかぼかひろば」は、東京家政学院大学で行われている、地域在住の0歳から3歳までの乳幼児とその家族（親・きょうだい等）を対象とする親子参加型の地域子育て支援グループ活動である。なお、ここで言う「親子参加型」の「親」とは母親のみを指すのではなく、父親や祖父母等、広く保護者全般を指すものである。

本活動は「児童臨床実習Ⅰ・Ⅱ」として本学児童学科4年生の専門選択科目授業に位置づけられ、学生にとっては学内における貴重な保育実践の場となっている。

地域子育て支援拠点事業（ひろば型）の基本理念をもとに開設した「ぼかぼかひろば」活動では、さらにそこに保育者養成および次世代育成のねらいを加え、次の4点を活動全体のねらいとしている。³⁾

- ①親と子がほっとできるような「居場所(子育てひろば)作り」を通し、大学内における子育て支援活動という特性を生かし、親と子・学生・教員が出会い、共に育ちあう子育てをめざす。
- ②一人ひとりの子どもたちの成長や個性を大切に、共にゆったりとした楽しい時間を過ごす中で、心豊かで多様なかかわりを育む。
- ③参加者同士がお互いに子どもたちの様子を見守りながら、子育て等についての話し合いや情報交換をおこなう。こうした活動を通じ、保護者は、他の親子とのかかわりを持つことで、自身の子育てを見つめ、視野を広げる場とする。
- ④学生は、直接、乳幼児や保護者と接することで乳幼児期の子どもの成長を実感し、また保護者の思いを受けとめ共感し理解する、保育者としての力を培う場とする。

2. コロナ禍におけるぼかぼかひろば活動

コロナ禍における2年間の活動をまとめる。

2.1 ぼかぼかひろば2020年度（コロナ禍1年目）の活動

まずコロナ禍1年目にあたる2020年度の活動を「コロナ禍における大学発「地域子育て支援」の

果たす役割 I — 2020 年度「子育てひろば」活動の実践から」(柳瀬ら, 2020)²⁾をもとにまとめる。

①活動の概要

2020年度活動の参加親子は10組(子ども11名)で、スタッフは4年生が9名、教員スタッフが3名(教員1名、補助員2名)である。

例年であれば4月中に準備、5月のGW前後に活動開始であったが、コロナ感染拡大により大学が休校となったため、活動開始を6月19日に延期した。その間、2020年度の活動のあり方についてスタッフ間で検討を重ねた。検討の結果、遠隔会議システム(Zoom)を活用した双方向的なやりとり(ぼかぼかLIVE)と子どもが楽しめる動画(ぼかぼかチャンネル:学生が作成したもの)の配信を組み合わせた2部構成でオンラインを主体とした活動を行うこととした(表1参照)。ぼかぼかLIVEでは年間を通してクイズやゲーム等の他、事前に送った工作キットや各家庭に準備してもらった材料で制作を一緒に楽しむ等の活動を行った。

表1 1回の活動のおもな活動の流れ

時間	おもな活動の流れ
10:00	(学生・教員) ・打ち合わせ ・ぼかぼかLIVEリハーサル
10:50	○ 参加親子zoom入室開始
【第1部】	○ はじまりのうた
11:00	○ 名前呼び ○ ぼかぼかLIVE ・手遊び・ゲーム・制作 など ○ぼかぼかサロン(隔週)
【第2部】	○ ぼかぼかチャンネル
11:20	・手遊び・歌・絵本の読み聞かせ・ダンス など 学生が制作した動画コンテンツ
	○ おわりのうた
11:40	○ 活動終了(参加親子退室)
12:00	・親子退室後、学生・教員で活動の振り返りと次回打ち合わせ ・解散

(*時刻はおおよその目安)

ぼかぼかオンラインひろば

た。動画については、活動終了後もYouTubeにより参加者限定公開で何度でも楽しめるようにした。

活動頻度については、自由な外出もままならない乳幼児のいる家庭への支援を目的に、従来の月2回の活動から原則毎週(年間計21回)の活動を実施することとした。途中、12月第1週目には、プレイルームを使用し、対面による行事活動(クリスマス会)を実施することもできた。

②学生の様子

前期は不慣れなオンライン活動や動画作成に苦勞し、自分の作業や役割をこなすことで精一杯だったが、しだいに子どもたちの表情や反応を見ながらの活動ができるようになった。どのようなコンテンツが喜ばれるか、より深く試行錯誤しながら活動ができるようになり、毎回の活動後の感想や期末レポートに、コロナ禍での子育て支援の意義について言及したものが多く見られた。

③参加保護者へのアンケート

2020年度活動の参加保護者10名を対象に、前期終了後の8月と後期12月にアンケートを実施した(9名回答)。外出自粛生活によるストレスや先の見通しの立たない不安を訴える中、「ぼかぼかひろば」の時間は「他の親子や学生と交流できるのがとにかく楽しかった。」「天気が悪くても、少々体調が悪くても参加できる。」「子育ての悩みを語り合ったりアドバイスをもらったり、他の親子の様子もわかって孤独にならずにすんだ。」「学生さんが一生懸命活動を考えてくれているのが嬉しかった。」等、遊びのアイデアが参考になったという点と人と人とのつながりを実感できる点を評価する声が高かった。

④スタッフ(補助員)へのインタビュー

対象:補助員2名(経験年数:A7年目、B2年目。Aは保育士・幼稚園教諭、Bは管理栄養士の資格を有している。)にオンライン活動の感想と課題を中心にインタビューを実施した。

また途中から、定期的に参加者同士の語り合いをメインとした時間(ぼかぼかサロン)を導入し

結果：Aは親族の介護のために3月に東京を離れていたが、コロナのために東京との往復ができない状況となり、前期はリモートでの参加となった。A自身が不安な状況の中での生活を送っていたこともあり、たとえ画面越しであっても、顔が見え言葉を交わせるという人とのつながりが安心感につながることの重要性や、どこからでも参加できる強み等が実感に基づいて語られた。

Bは大学への出勤が可能で、筆者と一緒に大学から毎回Zoomで参加した。子どもたちのSNSへの適応力に驚きつつ、そこに人との交流や意思の疎通がしっかりあることで、十分にコミュニケーションツールとしての役割を果たせると感じたこと、それだけに、その使われ方が重要だと感じた、と語った。

一方で、両名とも、オンライン活動の限界として、直接対面で会うことで相互に感じ合う空気感のようがないことを挙げ、12月に学内で対面活動を実施して以降のオンライン活動が、より親しみを感じられるものとなったことを例に挙げた。

2.2 ぽかぽかひろば2021年度（コロナ禍2年目）の活動

①活動の概要

2021年度活動の参加親子は、前期は親子8組・子9名、後期は親子11組・子11名、学生の通年参加は12名である。

2020年度は大半がオンライン活動であったのに対し、2021年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、4～6月、10月はオンライン活動（12回）となったものの、それ以外は学内での対面活動（6回）を実施することができた。

なお、オンライン活動期間中は週1回のペースで活動を実施した。

②学生の様子

前年度の遠隔授業の経験から、学生や教員も、また参加保護者自身もZoomの利用に慣れたこと

もあり、オンライン活動もスムーズに行うことができた。学生の動画コンテンツの作成技術も向上し、「コロナで思うように外出できない」という保護者の話を受け、動物園や水族館に出かけて撮影してきた動画を作成した学生もいた。

また学内のプレイルームを使用した対面活動において、「室内遊びがワンパターンになってしまう」という保護者の悩みを受け、プレイルームでピクニックをイメージして親子で一緒に楽しめるような活動を取り入れる等、相手の状況やニーズに合わせて活動内容を考えようという姿勢が感じられた。

③参加保護者へのアンケート

2021年度の活動参加保護者を対象に年度末に実施したアンケートから得られた回答を以下にまとめる。（11名中9名回答）

コロナ禍での子育て上のストレスについて

ストレスを感じた場面について、強くストレスを感じた順に1位から3位まで選んでもらった。

集計に当たっては、1位に選ばれた場面を3点とし、以下2は2点、3位は1点として計算した。

その結果、点数順では1位「家庭外の遊び場がない」「思うように外出できない」（各14点）、3位「どこかに子どもを預ける際のプレッシャーを感じる」（13点）となった。また、場面別で最も多く1位に選ばれたのは「家庭外の遊び場がない」「思うように外出できない」場面（各3名）で、2位で最も多く選ばれたのは「どこかに子どもを預ける際のプレッシャーを感じる」場面（4名）であった。

以上の結果から、子どもを抱え、思うように身動きできない状況に親がストレスを感じていることがわかった。

〈アンケートの自由記述回答から〉

活動全体を振り返っての自由記述からは以下のような回答が得られた。

活動全体について (子どもにとって)

- 学生に「可愛い」「上手」とほめてもらえたことが自信になった。
- 異年齢の他児や学生との遊びがよい刺激になった。
- マスク越しでも伝わってくる学生や教員の笑顔がよかった。
- 学生がたくさん遊んでくれたことや精一杯工夫して活動準備してくれたことが嬉しく楽しかった。
- 遊び場が限られるこのご時世で子どもと親が楽しめる居場所に感謝している。 他

活動全体について (保護者にとって)

- (コロナで) 子育て中の保護者との交流が少ない中、他の保護者との交流ができて良かった。
- 情報交換することでいいアイデアがもらえて、育児の参考になった。
- お母さんだけで話せる時間がリフレッシュになり楽しかった。 他

オンライン活動について

- 月齢が小さいため、子どもはリモートの活動はずっと参加できなかったが、親の方が楽しませてもらった。
- 対面だと聞けない子育ての悩みや不安が、オンラインの方がゆっくり聞ける点がオンラインの良さだと思った。
- 大変だとは思いますが、コロナのことがあるので、毎回、オンラインか対面かが選べると良かった。 他

自由記述回答からは、思うように外出できない状況の中で、オンライン活動であっても、人とつながることで安心感を得たり、誰かが自分たち親子のために時間や心をかけてくれたということそのものが嬉しく、心の支えになると感じていることがわかった。

④スタッフ (補助員) へのインタビュー

対象：2020年度と同じスタッフ2名に、前年度の活動も踏まえ、インタビューを実施した。

結果：「この2年間、コロナ禍のため、学内外の実習活動で制約を受けてきた学生にとって、直接子どもとかかわることのできる機会そのものが、保育者としての学びのモチベーションにつながったのではないかと」「ただつながるだけでなく、『どのようにつながるか』について考え、学生が工夫していた」と学生の意識や技術的な成長などが語られた他、コロナとの関連で、学生の内に危機管理や健康・安全対策に取り組んだ経験はプラスの学びになったと思う、といったことが語られた。

3. コロナ禍における子育て支援活動

3.1 オンライン活動のメリットと難しさ

2020-2021年度の参加学生 (21名) の毎回の活動後の振り返りや期末レポートからオンライン活動のメリットと難しさを取り上げ、テキストマイニングを用いて分析した。その結果、オンライン活動のメリットとして「少し体調が悪い時でも参加できる」「コロナの感染リスクを抑えて活動できる」「家庭での自然な親子のかかわりを見ることが出来る」「動画共有などリモートならではの活動が楽しめる」などが挙げられた。一方で課題として「お互いの雰囲気を感じる事が難しい」「ネット環境に左右される」「一斉に歌うなどの活動ではラグが生じてしまう」が挙げられた。

3.2 オンライン活動と対面活動との比較

オンライン活動 (12回) と対面活動 (6回) の両方を複数回実践することのできた2021年度の参加学生 (12名) の期末レポートから両方の活動を比較しての感想と今後の可能性について、テキストマイニングを用いて分析した。(図1)

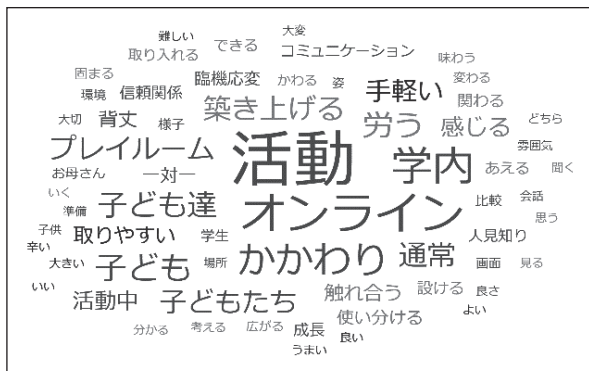


図1 オンライン活動と対面活動の比較

その結果、「子どもと関わり、信頼関係などを築き上げていくことは、対面でないと難しい」としながらも、うまく活動内容や状況に応じて2つの活動を組み合わせていくことで、活動内容のバリエーションが増えるのではないかと結論が得られた。

V まとめ及び今後の研究課題

今回の研究では、コロナ禍での2年間の大学における子育て支援活動をまとめた。コロナ禍であるからといって子育て支援活動に取り組む基本的な姿勢そのものに違いはなく、やはり、同じ空間で、対面で直接かかわることが、支援において重要であることを改めて実感することとなった。しかし、対面が許されない状況下では、オンライン活動が人とつながっていることへの安心感をもたらすものとなっていることも事実であり、活動内容を工夫し、双方向的なやりとりを取り入れ、「今、人とつながっている」という感覚を積極的に活動に生かすことや、つながりのバリエーションを豊かにすることで、現在、コロナ禍で制約を受けている対人関係やコミュニケーション面を補うものとなりうると考える。

コロナ収束後、コロナ禍に幼少期を過ごした子どもたちの成長にどのような影響が表れるのか、

慎重に見守りながら、今後の子育て支援活動のあり方について引き続き考えていきたい。また、大学における子育て支援活動という点では、冒頭の「本研究の背景」で述べたように、保育や心理学、子育てに関する専門的な知識やスキルについ

て、保護者が活動を通して学ぶことができるという点が大きな魅力となっている。実際、参加理由に「大学での活動である」ことを挙げる保護者は多く、大学の専門性に対する保護者のニーズに即した子育て支援とは何かについても検討を重ねていきたい。

この他、実際に活動を進めていく中で、学生の存在を肯定的に評価する保護者は多い。このことから、地域の子育て支援センターなどにはない、大学ならではの子育て支援活動の特色として、学生の存在は大きな意味を持つと考えられる。改めて、学生の果たす役割について考察し、学生の存在を活かした大学における子育て支援活動についても今後の研究課題とし、考えていきたい。

謝辞

本研究報告をまとめるにあたり「ぼかぼかひろば」活動に参加して下さったお子様と保護者の皆様、この活動を共に作り上げてきた学生諸君、授業を支えて下さった2名の補助員、その他、全ての方々に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 草津市 草津未来研究所 (2015) 大学と地域の連携に関する調査研究報告書 — 大学のある都市としての優位性を活かすために 一、1-2
- 2) 柳瀬洋美、白川佳子、小原敏郎、吉永早苗 (2021) コロナ禍における大学発「地域子育て支援」の果たす役割 I — 2020 年度「子育てひろば」活動の実践から — (日本保育学会第74回大会発表)
- 3) 柳瀬洋美 (2018) 大学における地域子育て支援グループ活動 II — 「ぼかぼかひろば」10年の活動から —、現代児童学研究第1巻第1号、77-83

参考文献

- 1) 岩国亜紀子、槻木直子他 (2017) 乳児の養育

者と共に考える子育て支援プログラムの評価
—参加型アクションリサーチ—、兵庫県立
大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要24、
115-130

- 2) 江崎グリコ株式会社 (2020) コロナ禍における子育てに関するパパママ意識調査
- 3) 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター(2020) 新型コロナウイルス感染症流行に伴う乳幼児の成育環境の変化に関する緊急調査
- 4) 深沼光 (2010) 大学と地域の連携—継続の効果と課題—日本政策金融公庫論集 第7号、1-28
- 5) 松島みどり (2021) 調査から見えてきた産後の抑うつリスク—妊娠期・産褥期の母親の精神的健康状態に関する調査から、助産雑誌 75巻4号 pp.242-249、医学書院
- 5) 柳瀬洋美 (2009) 大学における地域子育て支援活動を考える—乳児期・子育て支援活動の実践—、東京家政学院大学紀要第49号、67-73
- 6) 柳瀬洋美 (2010) 大学における乳児期・子育て支援グループ活動 I—親支援・家族支援の場としての「子育てひろば」、東京家政学院大学紀要第50号、1-12
- 7) 柳瀬洋美 (2011) 乳児グループ活動の成り立ちと展開、吉川晴美編「子育て発達支援—地域に開く大学として共に育つ保育活動から—」第Ⅲ巻(東京家政学院大学児童学研究室・地域に開く子育て・発達支援研究会、87-99、106-107
- 8) 柳瀬洋美 (2011) 大学における地域子育て支援グループ活動—保育者養成という視点から—(全国保育養成協議会第50回研究大会発表)

(令和4年4月19日受付)

(令和4年5月21日受理)